The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	it-Cleft 構文の語用論 : 語用論的機能とその効果
Author(s)	篠原, 弘樹
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2011, 45, p. 67-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

it-Cleft構文の語用論

──語用論的機能とその効果──

篠　原　弘　樹

キーワード：*it*-Cleft構文，構文の意味，談話，語用論的機能，語用論的効果

1. 序

本稿は英語の *it*-Cleft 構文の語用論的機能とその効果に着目し、考察を行う。従来、この構文は *It was John that gave Mary the book.* に代表されるようにその形式［it be X that Y］のXを強調するものと考えられてきた。そして、その情報構造は［it be 新情報 that 旧情報］を示し、Xは総記の意味を持ち、Yは前提を示すとされてきた。

しかし、1970 年代以降、この構文にはある要素を強調する以外の機能が存在すると指摘されるようになった。確かにそれらの指摘は、この構文の語用論的特徴を捉えるものであるが、この構文を体系的にみた場合、問題が残るように思える。本稿では、その問題を踏まえてこの構文の語用論的機能とその効果を体系的に捉える提案を行う。

具体的な考察に入る前に、本稿で用いる用語と想定している構文の意味と談話の関係について説明したい。「語用論的機能」は話し手の立場で *it*-Cleft 文がどのような目的 / 意図で使用されるかを示す語とし、「語用論的効果」は聞き手が *it*-Cleft 文をどう解釈するかを示す用語とする。よって、語用論的機能は話し手の観点に関わり、語用論的効果はそれを解釈する聞き手の観点に関わる。また、構文の意味と構文内の個別の機能についても注意が必要である。*it*-Cleft 構文は、Xの要素が総記を示し、Yが前提を

示す構文の意味を持つ。そして、これらの構文の意味が、XとYに生じる要素に与えられて談話に反映された場合、その構文の意味が与えられたXとYはそれぞれに個別の機能を持つ。よって、語用論的機能には、*it*-Cleft構文内の個別の機能、つまり総記と前提のそれぞれがどのような役割を談話で果たすかという意味での機能と、全体の機能、即ち*it*-Cleft構文全体としてどういった機能を持つかという2つの観点がある。本稿では、その2つの観点をも踏まえた提案を後に行う。

構成は以下の通りである。まず2節で先行研究を概観し、その後3節で問題点の指摘を行う。4節は提案と分析を行い、5節は結語とする。

2. 先行研究

本節では情報構造の分析を代表するPrince（1978）と前提の機能に着目したDelin（1992）を紹介する。Prince（1978）は*it*-Cleft構文を2種類―（Stressed Focus *it*-Clefts（強調の*it*-Cleft構文(1)）とInformative *it*-Clefts（伝達の*it*-Cleft構文(2)）―に分類し、必ずしもある要素を強調する機能のみが、この構文の特徴ではないと指摘している。

(1) Who made this mold? Was it the teachers (that made this mold)? Was it the medicine man (that made this mold)?
（括弧＝省略可能（Prince（1978: 897））

(2) ## It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. ...
（##=談話の冒頭(Prince（1978: 898））

強調の*it*-Cleft構文と伝達の*it*-Cleft構文では、前者では強勢がXに落ちる一方で、後者では必ずしもそうではない点が異なる。また、前者ではYが省略できる場合（(1)の括弧）が多いが、後者では省略できない。更にはその情報構造も異なる。前者は［it be 新 that 旧］の情報構造を示すが、

後者は［it be 旧 / 新 that 新］である。特に注目すべき相違点は、Ｙの情報構造についてである。通常 *it*-Cleft 構文のＹは前提を示すので、談話ではその特徴が反映された旧情報が生じやすい。しかし、伝達の *it*-Cleft 構文ではＹが前提を示すはずにも関わらず、その特徴が反映されていない。(2)の伝達の *it*-Cleft 文は、談話の冒頭に用いられていることからＹが新情報を示すが、それは前提の旧情報が生じやすい特徴とは異なっている。Prince（1978）は、この異質な特徴に対して以下のように指摘している。

(3)　*... one of their functions is to mark a piece of information as fact, known to some people although not yet known to the intended hearer.*　(Prince（1978: 899))

(4)　*The whole point of these sentences is to inform the hearer of that very information.*　(Prince（1978: 898))

つまり、彼女は伝達の *it*-Cleft 構文のＹは、その情報が新情報であっても事実のように伝える機能(3)を持ち、その文全体の特徴は情報をまさに伝達することにある(4)と指摘している。

次に Delin（1992）を紹介する。Delin（1992）は、Prince（1978）のＹの個別の機能に対して反論を展開している。

(5)　*Information placed within an it-Cleft presupposition appears to* **remind** *rather than* **inform**. ...　(Delin(1992: 289))

(5)からＹの機能が伝達（Inform）というより、喚起 / 確認（Remind）であると指摘していることがわかる。Delin（1992）の考察によると、Ｙは前提という特徴から照応表現の特徴をおびるために、どのような情報がＹに生じたとしても喚起 / 確認として機能する。その根拠として(6)をあげている。

(6) ... It was such legalistic hamfistedness which was to make the life of the Church of England such an artificial observance for so any in the following century. (Delin (1992: 296))

such や *so* は強調の読みと照応の読みの2種類があるが、(6)の *it*-Cleft 文のY（下線部）では照応の読みが優先される。その一方で、上記を通常文に書き換えるとその傾向はなくなる。つまり、Yで照応読みの傾向が高くなる事実から照応表現の特徴が確認でき、そこから喚起 / 確認が生じると指摘しているのである。その結果、Yに先行する文脈にその指示対象をもたない新情報が生じたとしても、前提の照応表現の特徴からまるで指示対象が存在するかのように扱われて喚起 / 確認（Remind）の機能が生じることになる。

3. 問題点

本節では5つの問題点を指摘する。第一に、個別と全体の機能の関係がこれまでの先行研究では考察されていない。序の想定の説明で示したように、この構文はXが総記の特徴を示し、Yが前提を示す構文の意味を持つ。そして、それらがXとYに生じる要素に与えられ談話に反映された結果、個別の機能が生じる。この観点で考えると、Prince（1978）の伝達の *it*-Cleft 構文はYの前提の意味が反映された結果、Yに生じる新情報を（前提のように）事実として提示する機能を持ち、全体として伝達の機能を持つと分析できる。しかしその場合、Xの総記はどのような役割を果たすのであろうか。また強調の *it*-Cleft 構文は、どの意味や個別の機能が用いられた結果、全体として強調の機能を提示するかが言及されていない。

第二に、*it*-Cleft 構文を体系的に捉える場合、情報構造に基づく分析では問題が生じる。Prince（1978）以降、情報構造の分析に基づいた考察

（Declerck（1988）、Hedberg（1990）など）が数多く行われてきたが、それらにおいても同様の問題がある。それらの研究手法は、*it*-Cleft 構文をさらに細かな情報構造の観点で分類し、その特徴を記述することにある。確かに、この手法は有用だが、分類された下位構文の関係性が見えなくなる。つまり、Prince（1978）のように『*it*-Cleft 構文には 2 種類存在し、その特徴は○○である。』という分析は、その特徴を記述するのには有用だが、なぜ *it*-Cleft 構文には同じ形式［it be X that Y］で強調と伝達の 2 種類が存在するのか、また、その 2 種類の *it*-Cleft 構文はどのように関連づけられるのかが説明されていない。従って、体系的に捉える分析が必要である。

次に第三の問題として、情報構造に基づく分析では対処し難い事例の存在があげられる。

（7）　[Title: A North African Anecdote: The Peacock]... he heard someone screaming. In the melee, my Dad thought that HE was screaming, due to being hit. He looked up, and saw, perched in the branches of the tree, a peacock. The peacock was used by the farmer as a watchdog, and <u>it was IT that was doing the screaming</u>, terrified by the barrage.　（BBC）

(7)の *it*-Cleft 文の情報構造は［it be 旧 that 旧］にあたる。X の *it* はその指示対象が前文に登場する *peacock* であり、代名詞の特徴から旧情報に属する。また Y の「誰かが悲鳴をあげたこと」は、その *it*-Cleft 文以前の文脈上で明らかなために旧情報となる。よって、強調の *it*-Cleft 構文［it be 新 that 旧］にも伝達の *it*-Cleft 構文［it be 旧 / 新 that 新］にもあてはまらない。他の研究（Declerck（1988）、Hedberg（1990））でも、このような情報構造［it be 旧 that 旧］を持つ *it*-Cleft 文の分類は指摘されていない。この理由は情報構造での分析の大前提が、全ての文は何かしらの意味で新

情報を持ち、全てが旧情報にあたる文は情報価値に欠けるため容認されないというものであるためと考えられる。

しかし、(7)のような例文を全く分析できない訳ではない。例えば、強勢をも含めた観点―新情報を含む情報単位（Information Unit）には強勢が落ちる（Gundel（1988）や Hedberg（1990）の Topic/Comment に基づく分析）―を取り入れ、この場合の *it* には強勢が落ちるため新情報扱いとするならば、[it be 新 that 旧] で強調の *it*-Cleft 構文にあたると分析できる。また、その *it* の指示対象は既に言及されているので旧情報にあたるが、聞き手にとっては予想することができないので、より新情報的な扱い―Hearer-old, Discourse-new（Birner and Ward（1998））―を受け、これは強調の *it*-Cleft 構文であると分析することも可能であろう。

しかし *it* を新情報として扱うには、2 つの点で問題がある。まず、代名詞の *it* は核強勢を受けない照応表現で、統語上、核強勢が入る位置には生じないという指摘がある（Declerck（1988: 14））。つまり、強調の *it*-Cleft 文では核強勢が X に落ちるので、統語上、核強勢が X に固定されるとした場合、その位置には核強勢を受けない照応表現の *it* は生起できないはずである。例えば、*What broke the window?* の問いに対して、強調の *it*-Cleft 文で**It's IT that broke the window.* と答えることは出来ない。また、代名詞の *it* は参与者間で意識せずとも理解できる指示対象を指す―In Focus（Gundel et. al（1993））の―特徴を持つので、予想できない情報のために新情報扱いになるという分析も、*it* の特徴と矛盾する。よって、(7)を情報構造の分析に基づいて捉えるのは難しいように思える。

第四の問題は、Delin（1992）の喚起 / 確認（Remind）についてである。Delin（1992）は前提の照応表現の特徴から Y は喚起 / 確認の機能を示すと指摘しているが、その語用論的効果（聞き手の解釈）を考えると、問題が生じる。

(8)　## It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend.　=(2)

(8)の *it*-Cleft 文は談話の冒頭で使用されていることから、全体が新情報である。Delin（1992）に従うと、Yが情報を照応的に扱うので喚起 / 確認の機能が生じるが、その解釈が実際に生じるかは不明である。つまり、喚起 / 確認とは聞き手が当該の情報を既に知っていることで初めて生じるものであって、知らない情報を喚起 / 確認することは出来ない。よって、冒頭の新情報という特徴から常に(8)を喚起 / 確認と解釈するのは難しいように思える。また、Delin（1992）の主張はYの情報がまるで喚起 / 確認のように扱われるという指摘のため、実際には聞き手の解釈が常に喚起 / 確認である必要はない。そこで改めて(8)をみると、その文の意図はやはり Prince（1978）が指摘する通り、情報を正に伝達するという部分にあるように思えるので、その解釈は喚起 / 確認というよりも伝達とみなす方が妥当であると思われる。しかし、上記の主張は聞き手が(8)の命題内容を知らないという想定においてのみ正しいという点を見逃してはならない。つまり、先述とは異なり、聞き手が(8)の命題内容を既に知っていた場合には、その解釈は伝達というよりも当該の情報を既に知っていることから、今度は喚起 / 確認とみる方が妥当になる。よって問題は、喚起 / 確認の解釈の範囲設定にある。つまり、Delin（1992）は喚起 / 確認を常に生じる機能と指摘しているが、聞き手にとっての解釈は常にそうではない。事実、聞き手が当該の情報を知っているかどうかでその解釈が変わる。従って、喚起 / 確認が生じる状況を改めて考察する必要があるのである。

最後の問題は語用論的効果（聞き手の解釈）の曖昧性についてである。これは既に上記の問題指摘のなかでもみられた問題である。

(9)　... it was IT that was doing the screaming, ...　=(7)

(10)　##It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend.　=(2)

(9)と(10)の *it*-Cleft 文には解釈がそれぞれ 2 通り生じる。(9)に関しては、情報構造の分析では例外的にはなるが強調としての解釈、そしてもう 1 つは喚起 / 確認の解釈である。話し手が「孔雀」を強調して「悲鳴をあげていたのは孔雀だ。」と聞き手が解釈した場合には、強調の解釈が生じる。しかしこの文脈を考えると、*it* の指示対象である「孔雀」も Y の「誰かが悲鳴をあげた。」も文脈から明らかであり、さらにはタイトルが孔雀についてということからも、容易に「孔雀が叫んだ。」ことが *it*-Cleft 文の発話以前に読み取れる。よって、この *it*-Cleft 文に喚起 / 確認―特に確認―としての解釈を与えることも可能である。(10)についても、第四の問題で指摘したように聞き手がその命題内容を知っているかどうかで、伝達と喚起 / 確認の 2 つの解釈が生じる。このような聞き手に応じた解釈の可変性は、これまでの先行研究では指摘されていない点であり、考察されてこなかった点である。

4. 提案と分析

本節では、語用論的機能と語用論的効果についてそれぞれの提案と分析を示す。語用論的機能は話し手がどのような目的 / 意図で *it*-Cleft 文を用いるかを示し、語用論的効果は聞き手の解釈についてであることをここで再度確認しておく。当然、機能と効果は相関する関係にあるが、語用論的効果には解釈の可変性が起こる点で異なるのである。

4.1　*it*-Cleft 構文の語用論的機能（話し手の立場）

提案の前に、構文の意味と語用論的機能の関係についての想定をここでもう一度確認しておきたい。*it*-Cleft 構文は、その形式［it be X that Y］でXが総記を、Yが前提を示す構文の意味をもつ。そして、XとYに与えられた構文の意味が談話に反映され、XとYのそれぞれが個別の機能を持ち、その結果として全体の機能（強調、伝達、喚起 / 確認）が生じる。ここで最も注意すべき点は、XとYの構文の意味が談話に反映されるというのは、実は話し手がある効果を引き出すために構文の意味を利用しているということである。よって、厳密に総記と前提の意味を満たすことが、この構文の成立条件になっているわけではないことにも注意が必要である。

（11）It is mainly tourists that come here.　（Declerck（1988: 33））

（12）It's not John that shot Mary. It's Mary that shot John.

（Hedberg（1990: 146））

例えば、(11)のXは厳密には総記の意味を満たしていない。総記はXの要素以外の他の成員が生起する可能性を排除し、「（他ではなく）Xのみが」という意味を持つが、(11)は *mainly*（主に）から観光客以外の可能性も考えられるので、厳密には総記の意味を満たしていない。また、(12)では前文の *it*-Cleft 文の前提が後で書き換えられている。つまり、*someone shot Mary* が *someone shot John* と書き換えられている。よって、厳密に考えると否定されない情報を提示する前提がここでは（否定され）書き換えられているので、前提の特徴を満たしていない。しかし、どちらの例文も容認されないわけではなく、むしろ、話し手はこれらの構文の意味を利用することである効果を引き出そうとしているのである。つまり、(11)ではあたかも総記的にXを解釈するように伝え、(12)の後半の *it*-Cleft 文では前文の前提を打ち消して、新たな情報を否定されない前提として再度解

釈するように聞き手に促している。よって *it*-Cleft 構文とは、構文の意味を満たすことがその成立条件に関わる構文ではなく、構文の意味を利用して総記的解釈や前提的な解釈を聞き手に促す構文なのである。この点を踏まえて(13)の語用論的機能を提案する。

(13) *it*-Cleft構文の語用論的機能

(縦軸：全体の語用論的機能　横軸:構文の意味)

	総記	前提	利用される意味
① 強調	○	×	総記のみが利用される
② 伝達	×	○	前提のみが利用される
③ 喚起 / 確認	×	×	どちらも利用されない
④ ϕ	○	○	どちらも利用される

(13)が示すのは、*it*-Cleft 構文の全体の機能には①強調、②伝達、③喚起 / 確認の 3 種類があり、それぞれはどの構文の意味がより反映されるか、即ち、話し手がどの構文の意味を利用するかに応じて決定されているということである。認知言語学の視点に立つならば、どの意味が前景化されるかによって生じる機能が異なるとも言えるだろう。具体的にそれぞれの例文を分析する。

(14) Who made this mold? Was it the teachers (that made this mold)? =(1)

(15) Shinran set out for present-day Ibaraki prefecture where he spread the teachings of the nembutsu. ... It is also said <u>that it was there that he wrote "Teaching, Practice, Faith, Attainment."</u>

(16) ... it was IT that was doing the screaming, ... =(7)

(14)は強調、(15)は伝達、(16)は喚起 / 確認の機能を持つ。(14)では、話

し手が総記の意味を利用して明示的に「先生たちのみが」と伝えることで *the teachers* を強調している。しかし、前提は参与者で共有されている情報なので利用されない。その一方、(15)は総記が利用されず前提の意味が利用される伝達の *it*-Cleft 文である。この場合、Ｙは参与者間で共有されていないので、話し手は前提の意味を利用してＹの部分をあたかも既成事実（共有された事実）であるかのように提示している。総記が利用されない理由は、この *it*-Cleft 文は茨城県（*there*）での出来事について言及しているのであってそれ以外ではないことにある。つまり、改めて再び茨城県以外の都道府県を排除し、「（他ではなく）茨城県のみが」ということを総記の意味を利用して明示的に示さなくとも、その文が茨城県についてのみ述べていることが文脈から明らかなために、改めて総記の意味を利用しなくても総記の読みが文脈から得られるためである。(16)を喚起 / 確認の *it*-Cleft 文としてみると、総記も前提も利用されていない。その文は「孔雀」について話しているので総記で敢えて明示的に「孔雀のみが」と示す必要がなく、前提についてもその情報は参与者で共有されている（(7)の文脈を参照）。その結果、その目的は構文の意味を利用するというよりも、すべて既知の情報を再度提示することで喚起 / 確認を提示することにある。

今後、検証を行う必要はあるが、両方の構文の意味が利用される *it*-Cleft 文（(13)の ϕ）は存在しないように思える。実際、総記が利用される例文(17a）に前提が利用されるように参与者が共有しないであろう多くの情報をＹに与えた場合（17b)、その容認度は低くなる。

(17) a. It is mainly tourists that come here. =(11)

b. ??It is mainly tourists that come to see the most beautiful water fall in the world, Niagara Falls.

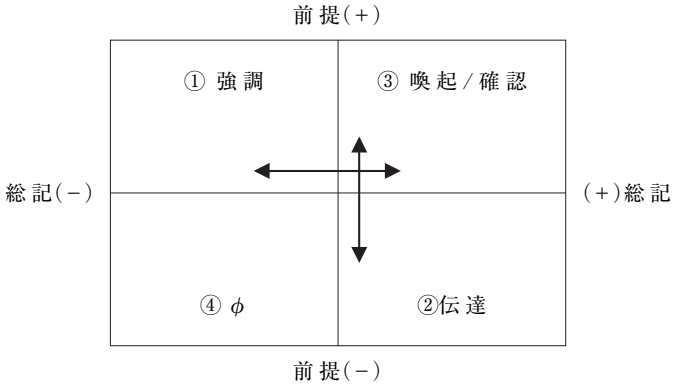
4.2 *it*-Cleft 構文の語用論的効果（聞き手の立場）

(13)を踏まえ、その効果（解釈）について(18)を提案する。(13)と(18)は相関するが、(18)は聞き手の解釈の可変性を捉えている点で異なる。

(18) *it*-Cleft構文の語用論的効果

・縦軸=談話上、前提の情報が参与者間で共有されているかどうか。

・横軸=談話上、総記の読みが参与者間で共有されているかどうか。



(18)の縦軸と横軸は、それぞれ談話上で総記の読みと前提の情報が参与者間で共有されているかどうかを示している。談話上、前提が共有されている―前提（+）―とは、参与者間でYの情報が共有されている場合にあたる。談話上、総記が共有されている―（+）総記―とは、参与者がXの要素の総記（的）解釈を共有しているかどうかにあたる。

話し手の立場の(13)と聞き手の立場の(18)では、(13)の○が(18)の（−）に対応し、×が（+）に対応する。例えば、強調の *it*-Cleft 構文を取り上げると、話し手が強調の機能を引き出す場合、話し手は総記の意味を利用する（(13)の総記（○））。その場合、聞き手はその *it*-Cleft 文でXの要素の総記解釈を初めて行い、強調の解釈を得るので、参与者間で総記の読み

が事前に共有されていないことになる（(18)の総記（－））。その一方で、強調の機能を出す場合の前提は、利用されない個別の意味（(13)の前提（×））だが、聞き手にとってはその情報が参与者間で事前に共有されているので、(18)では前提が（＋）になる。

(13)の語用論的機能と異なる点として、(18)の矢印がある。これは解釈の可変性を示す。ある文脈では①強調と③喚起／確認の２通りの解釈が生じることを示し、②伝達と③喚起／確認でも２通りの可能性があることを示している。しかし、①強調と②伝達の２通りの解釈が同時に生じることは難しい。提案に基づいて、具体的に事例を分析する。

(19) Who made this mold? Was it the teachers (that made this mold)? =(1)

(19)の前提は参与者間で共有されているので、談話上前提が共有されているが、聞き手は *the teachers* の総記解釈をこの *it*-Cleft 文で初めて行うので総記の読みは共有されていない。従って、強調の解釈が生じる。

(20) I met John yesterday at the party. It was him that kissed Mary.

(20)のＹは参与者間で共有されていない情報なので、前提は共有されていない。しかし、Ｘの総記解釈は共有されている。この *it*-Cleft 文は *him*（*John*）について述べているものであって、それ以外の *Tom* や *Jay* についてではない。つまり、*John* についてのみ言及していることが談話上明らかなため、総記の読みが参与者間で共有されている。この結果、(20)は伝達の *it*-Cleft 文として解釈される。

このように考えると、総記が共有されているとは文の話題になっているかどうかに還元することができる。文の話題とは、その文が何について述べているかを示すので、聞き手がその文を解釈する場合、その文はその話

題について何かを話しているのであって、他の話題についてではないと解釈するのは当然であろう。

(21) ... It is also said that it was there that he wrote "Teaching, Practice, Faith, Attainment." =(15)

同様のことが(21)にもあてはまる。(21)では、茨城県での出来事について述べられているものであって、それ以外でないことは明らかである((15)の文脈を参照)。よって、総記の読みが談話上共有されている。その一方で、Yは参与者間で共有されていないので、結果として、伝達の *it*-Cleft 文として解釈される。

(22) ## It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. =(2)

(22)は談話の冒頭で使用されているので、Yの前提の情報は参与者間で共有されていない。また、総記の読みも一見、共有されていないように思える。しかし、この文の話題を考えると、最も妥当な要素は時を示す *just about 50 years ago* である。よって、話題の要素は総記を満たすという前述の考えを踏まえると、総記の読みは共有されるので、(22)では伝達の解釈が生じると分析できる。そして、ここで注意すべきは、解釈の可変性が生じる可能性についてである。つまり、逆に聞き手がYを事前に知っている場合には、先ほどとは異なり総記と前提の両方が共有されるので、喚起/確認の解釈が生じることになる。

(23) ... it was IT that was doing the screaming, terrified by the barrage. =(7)

(24) It was doing screaming.

(23)では、総記の読みも前提の情報も談話上、参与者間で共有されているので、喚起 / 確認の解釈が生じる（(7)の文脈を参照)。Yは先行文脈から明らかに参与者間で共有されている。Xについても、通常文に戻した(24)で *it* が文の話題になるのが明らかなため、総記の意味が共有されている。そして、ここでも解釈の可変性が生じる可能性がある。(23)の話題は *it* であるが、*someone was doing the screaming* とも考えることは可能であろう。その場合には、Xの *it* の総記の読みが共有されず、結果として、今度は強調の解釈が生じる。ただし、この解釈は、Declerck（1988）— *it* は強調の *it*-Cleft 文のXに生じない—に従うならば、例外的になる可能性はある。しかし、この *it* が強調されていると解釈できるのも同時に事実である。

最後に、解釈の可変性で、なぜ強調と伝達の解釈を同時に持つ *it*-Cleft 文が難しいかについて考察する。これは、強調と伝達はその解釈が反する関係にあるためと考えられる。(18)をみると、強調と喚起 / 確認では、縦軸の特徴を共有するが、横軸が異なる。同様に、伝達と喚起 / 確認では、横軸の特徴を共有するが、縦軸が異なる。しかし、強調と伝達では、縦軸にも横軸にも共通する特徴が見いだせない。従って、互いの解釈が相反する関係にあるため同時に2つの解釈を考えることが難しいのである。

5. 結語

本稿は *it*-Cleft 構文の語用論的機能とその効果を体系的に捉える提案を行った。(13)は語用論的機能を体系的に捉え、(18)はその効果（解釈）を捉えている。3節の問題1で述べたように、情報構造の分析では *it*-Cleft 構文の個別の機能と全体の機能の関係が十分に説明されてこなかった。しかし、(13)から *it*-Cleft 構文の3種類の全体の機能は、どの構文の意味が利用されるか、つまり言い換えるならば、構文の意味が談話で反映されて

生じるＸとＹの個別の機能の何れが用いられるかで異なることがわかる。また、問題２で先行研究は体系的に *it*-Cleft 構文を捉えていないと指摘したが、(13)の３種類の全体の機能は総記と前提を基準にして関連付けられているので、*it*-Cleft 構文が体系的に捉えられている。問題３の情報構造の分析では捉えにくい事例は、喚起／確認の *it*-Cleft 文を体系の中に組み入れることで解決されている。また、問題４の喚起／確認の使用制限の範囲は、(13)と(18)で明らかにされている。最後の解釈の可変性の問題は、(18)の矢印で提示されている。

参考文献

Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudoclefts*, Foris, Holland.

Delin, Judy (1992) "Properties of *It*-Cleft Presupposition," *Journal of Semantics* 9, 289-306.

Gundel, Janette K. (1988) "Universals of Topic-Comment Structure," in Michael Hammond, Edith A. Moravcsik and Jessica Wirth (eds.), *Studies in Syntactic Typology*, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia, 209-239.

Gundel, Janette K., Nancy Hedberg, and Ron Zacharski (1993) "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse," *Language* 69, 274-307.

Hedberg, Nancy (1990) *The Discourse Function of Cleft Sentences in English*, Ph.D. Dissertation, University of Minnesota.

Prince, Ellen (1978) "A Comparison of *Wh*-Clefts and *It*-Clefts in Discourse," *Language* 54, 883–906.

Ward, Gregory, and Betty J. Birner (2004) "Information Structure and Non-canonical Syntax," in Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.), *The Handbook of Pragmatics*, Basil Blackwell, Oxford, 153-174.

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

The Pragmatics of *it*-Cleft Constructions: Their Pragmatic Functions and Effects

Hiroki Shinohara

This article delves into *it*-Cleft constructions, [it be X that Y], from a pragmatic viewpoint. The main point is to show the systematic distribution of the pragmatic functions and effects.

One of the main questions arises from the methodology of previous studies. They have presented various functions, according to their information structures. Prince (1978) divides them into two groups: the Stressed Focus *it*-Cleft construction and the Informative *it*-Cleft construction as shown in (1) and (2). The information structure of the former is [it be New that Old], while the latter is represented as [it be Old/New that New]. The function of the former is to EMPHASIZE the elements in X, while the function of the latter is to INFORM the hearer of New information.

(1) Who made this mold? Was it the teachers (that made this mold)? Was it the medicine man (that made this mold) ?
(Brackets mean omissible (Prince (1978: 897)))

(2) ## It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend (## means an opening of discourse. (Prince (1978: 898)))

This kind of analysis is useful in that it can present the unique characteristics according to the group division. However, it is unclear why the construction has different functions according to the groups, even though the linguistic form is the same. In addition, there are some examples that the analyses of information structure cannot deal with. Therefore, in order to give an explanation to the relationship among functions and capture the exceptional cases, we need to present a new analysis with a systematic viewpoint, instead of the informational perspectives.

The proposal which this article presents shows the systematic distribution of the pragmatic functions and effect. The pragmatic functions are considered from the speaker's perspective, and the pragmatic effects are captured from the hearer's perspective. It is these dual viewpoints that lead to the clear explanation of the questions.